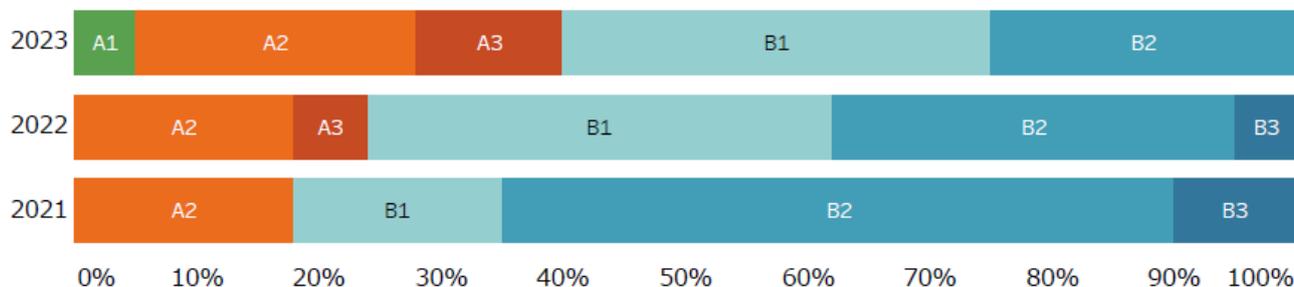


2023 年 東邦大学付属東邦 算数（前期）

過去 3 年の思考コード別出題割合は次のようになります。2022 年と比べて、B1、B2 が減り、B3 が見られなくなりました。2022 年に出題された調べる問題、資料を読み取る問題が影を潜め、テキストで見かける典型的な問題が主となりました。そのため、算数では差がつきづらいと思われま



大問 1 は、例年通り計算問題でした。(1)は分配法則を利用します。 $2023 = 17 \times 119$ が頭に入っていれば、素早く処理できたと思います。大問 2 も例年通り一行題でした。昨年と比べて問題数が増えています。どれもテキストで見かける典型的な問題となります。確実に得点をしておきたいです。また、(3)は毎年どこかで出題される「ニュートン算」でした。典型題であっても正答率が低く、ていねいな理解が必要な分野の 1 つです。

大問 3 は、食塩の濃度に関する問題でした。「食塩水 A と食塩水 B の濃度がともに 10%」とあるので、食塩水 B の濃度も 10%とわかります。食塩の量が 4g なので、はじめに加えた水の量を求めることができます。(1)、(2)どちらも得点しておきたい問題です。大問 4 は、3 人の旅人算でした。差がついた問題と思います。(1)(2)、(3)はそれぞれ独立しています。(1)と(2)は、AさんとCさん、BさんとCさんが初めてすれちがう 14 分、15 分 30 秒に着目します。(3)は、「Dさんは、Fさんを 31 分ごとに追い抜き、Eさんと Fさんは、10 分 20 秒ごとにすれちがいました」に着目します。

大問 5 は、相似比を利用した問題でした。(2)は、三角形 PBC と三角形 FEC が相似であることに注目します。(3)は、三角形 DPC を三角形 PFD と三角形 CDF に分けると、底辺 DF、高さがそれぞれ BE、CE とすることができます。大問 6 は積み上げた立方体の切断でした。(1)は、切り口が平行四辺形となります。ひし形ではない点に注意します。(2)は、1 段、2 段、3 段と、それぞれで切断されている・切断されていない立方体を調べていきます。

テキストで見かける典型的な問題が多く、がんばりが報われやすい問題構成となっています。反面、算数では差がつきづらく、1 問の失点が大きな差を生むこととなります。あくまでも予想ですが、大問 4、大問 5(2)、大問 6(2)を落としたとしても、およそ 7 割には達することができると思われま